

# 組合士 アラカルト

ニューファッションジュエリー  
協同組合事務局長

ほんま 本間  
てるお 照雄さん

## 十年二日、組合業務のオールラウンドプレーヤー

「組合員のビジネスの活性化に直接役立つようなサポートはできないけれど、組合としてできること、やるべきことはしっかりと遂行して、組合員の皆さんが安心して事業に全力を打ち込めるよう、環境を整備したい」。

これが、ニューファッションジュエリー協同組合事務局長の本間照雄さんの Motto である。

### 苦況だからこそ集結のパワーで

同組合は、アクセサリーや小物など女性装身具の事業者が集まって平成元年に設立された。現在の組合員は42社。その大半は家族経営かそれに近い規模と業態である。アクセサリーや小物は嗜好性も強く、デザイン力や感性など個性も求められる。しかし、せつかくそうといった力はある。営業まで手が回らないという組合員も多い。さらに、長引く景気停滞の中で業界の環境は厳しい。そういう条件が重なる中で、それなら、共同して見本市を開催して自らを発信していこう。そういう趣旨で集まり結成された組合で

あり、年2回の見本市の開催が組合主要事業となっている。

こうした思いはさらに同業の他組合とも共有されることとなり、四組合協議会（東京装身具工業協同組合、東京アクセサリー工業協同組合、東京髪飾品製造協同組合、当組合の4団体）という任意団体が結成されている。平成16年からは見本市開催も共同歩調を図っているほか、台東区のデザイン関係創業支援施設である「台東デザインナズビレッジ」の受付業務も区から受託しているところである。

### 「納得した仕事をした」と組合士に自ら挑戦

本間さんは事務局長であるが、「前にも後にも誰もいない」一人事務局体制で見本市関連の各種業務（企画、招待準備・発送、招待客リスト更新等）、受付受託業務の管理、その他、総会へ向けた資料作成や会計等の組合業務をすべて担当しているオールラウンドプレーヤーである。

同組合にはハローワークを通じて平成

14年に入職したが、それまでは電気メーカーのサラリーマン。イベントや展示会の業務に携わったサラリーマン時代の経験・ノウハウは「活かせるし役に立てる」自信があったが、「組合という組織はまったく未知、白紙の存在」で、最初の1年は副理事長の指導と支援を受けながら、あとは各業務台帳と首つ引きで業務を覚える日々だったという。

元来、「仕事全般を見て、自分はどういう位置にいて、何ができるのか」をきちんと把握できないと納得がいかない性格だという本間さん。この性格は組合業務についてもフルに発揮され、東京都中央会のチラシで組合検定試験を知ると、即座に講習会に参加。入職翌年にさっそうと挑戦するも、会計で失敗。「それならば」と独学で日商簿記3級を身につけ、平成16年には見事検定試験合格を果たしている（組合士登録は平成17年）。こういうがんばりは組合役員の目にもとまり、資格手当という「ご褒美」もあったそうだ。

登録翌々年には組合法の大改正があっ

たが、「わからないことは中央会さんに教わりながら」、一人で定款改定の準備も担当し、「組合士の勉強が活きた」と実感したとも言っている。

### まだ10年。生涯現役で

今年に入職10年に当たる本間さんは「あつという間の10年だったし、まだ10年という思いです」と感想を述べる。自称「何でも屋」の本間さんだが、理事たちからは「ずっと現役でいてほしい」との声も強い。そこからは、今や組合になくはない存在となった姿も浮かび上がってくる。

東京都中小企業組合士協会を通じて仲間も増え、その仲間たちと企業訪問などにも参加している。こういう活動でさらに世界を広げながら、「それでもわからないことは中央会さんに教わって仕事をさらに充実させたい」と言う本間さん。そのオールラウンドプレーヤーとしての日々はまだまだ続く。

